



アートミーツケア学会 News+Letter

Vol.8 2011 Summer

CONTENTS

行かずに／行って 考える

関口 怜子

2010年度仙台大会「いのちの手ざわり からだ・殻だ・空だ・だから……」
実行委員エッセイ&学生レポート

| インフォメーション 入会のご案内 アートミーツケア学会2011年度総会・大会のご案内

行って／行かずに 考える

たんぽぽの家・東日本大震災支援プログラム関連特別講演会

2011年3月11日、東日本は大きく揺れました。それから3カ月が過ぎました。それぞれの場所で、私たちはあの日に起きたことに向き合い日々を過ごしているように思います。しかしいま自分には何ができるのか、何をすればいいのかわからないという人も多いのではないのでしょうか。

今号では、本学会理事であり、仙台に暮らす関口怜子さんとの対話から、私たちの暮らしや社会のことを考えてみたいと思います。

地震の日—— 展覧会「せんだいまちカミュージアム」

3月11日は、私が運営しているハート&アート空間 Be I（以下 Be I）の展覧会「せんだいまちカミュージアム」の初日でした。まちなかのお豆腐屋さんや電機屋さん、本屋さんなどを会場に、20カ所に作品を展示しました。私は、会場のひとつであったギャラリーで受付をしていました。すごく、長い揺れだったんです。この世の終わりかと思うくらいだね……。

今回わかったことは、生きていただけでありがたいということ。生きてだけで、本当によかった。それから、次に大事なものは、何か動くことによって、“I'm OK”、私はいいなあと思うことがあるのが、いいな。それからつぎに、“You are OK”、あなたもいいねと思えることがあるといいなと思いました。

「行って」感じる

相手があつての支援なんだということをもまずは考えてほしい。みんな状況が違います。相手によって、時



関口 怜子（せきぐち れいこ）／1987年12月、独自の考え方に基づき、仙台市内に子どもの創造表現空間「ハート&アート空間 Be I」を設立。ワークショップを通じて、子どもたちの表現力を引き出し、可能性を育てるカリキュラムを実践している。

期によって、支援のかたちは変わってきます。手はなんのためにあるかという、つなぐためにあるのではないのでしょうか。みんなはたまたま生きている。話なんか聞いている場合ではない人も、同じ東北にいる。

私は、動いて誰とでも手をつなぎたい。宮沢賢治は「東に病気の人あれば行って看病する」って言っていますよね。「行って」という言葉は、コミュニケーションの大事なエッセンス。コミュニケーションは「行く」か「来る」しかないんです。みんなに、現場に行ってみてほしいという気持ちがすごくあります。何もしなくていいですよ。まずは、感じてほしいと思います。

「行かず」に聞いて動く

ここで、B5サイズの紙を配りたいと思います。ただ置いただけでは、寝てしまいますよね。これを、いままで自分が生きてきたすべてを使って、5秒で素敵なたちに立たせてください。どうでしょう？ ただ、四角く折ることもできる。小さく折りたたんで広げてもいい。実は何が言いたいかというと、応用力がすごく



「毛利さんのロケット」を折る参加者



震災後のBe1のワークショップで生まれた作品

大事だということなんです。こんなかたちもありますね。

折り紙でつくった「毛利さんのロケット」があります。自立して飛ぶかたちになっています。ちょっとだけ手を添えてあげれば遠くまでいきます。力を入れすぎると、自滅します。折れますか？ さっきは「行って」と言いましたが、自分でわからないときは、「行かずに」、「聞いて」、動いてください。

地震が起きた日の夜、Be1の壁に貼ってある子どもた

ちの絵が力強く、勇気をもらいました。こんなときこそ、「行かずに」ここで、いつもと変わらぬ姿で居続ける事が大切なんだと、絵が語りかけてくれました。

これも支援のかたちなんですね。教育や支援は、その人が自立してちゃんと生きていけるようにするためにあるのではないのでしょうか。その人なりのオリジナルの生き方を支える。伴走者は力まずに、そっと寄り添うことが重要だと思うのです。

講演会の後半は、参加者との対話の時間となりました。

参加者1 いま、何かしたいという人は多いと思います。でも、物であれ、ソフトであれ、どうすればすぐに本当に必要としている人に届くのかわからない人も多いと思います。何かアドバイスをお願いします。

関口 時期によって、必要なものは変わります。その土地の知り合いを介し、「その人」に確実に届くような支援をするということがいまは大事なのではないのでしょうか。

参加者2 現地に子どもの本を贈るという活動を知り、自分ができることは少しでもやれたらと思って、参加しています。離れていて、何もできないからせめてと思って。でも、現地の状況を知りながら、だんだんと必要なものも変わってきて、送るにも送料もたくさんかかってしまいます。わずかだけど、私からすると家計から出費してるから……息切れしないのでできる応援をしたいとは思いますが、難しさをすごく感じています……。

関口 生きていくときに、すごく気をつけなくてはいけないと感じていることは、大きな無理はやめたほうがいいということです。生きていくというのは、生き続けていくことなので、できる範囲で、できることをやればいい。また、全国から支援物資が届き、現地で買う人がいなくなれば、お店の経営は難しくなります。物を送るのではなく、現地のお店を支援する仕組みをつくるのが現地を支えるという意味では大事なのではないのでしょうか。



参加者の一人が持ってきてくださった作品。避難所の子どもたちが絵を描いた。

「時期により、その人の状況により、必要なもの・ことは変わってくる。“その人”に届く、寄り添う支援を」。関口さんの体験から発せられる言葉はとてもまっすぐで、参加者の心にずっと入っていったように感じました。行ってもいい。行かなくてもいい。ただ、そこに起きたものを「ひとごと」にせず、つながりのなかで考え、動くことが、これからの私たちの暮らしをつくっていくのだと思います。

レポート：井尻貴子

開催日：2011年5月30日（月）

たんぼの家アートセンター HANA

主催：社会福祉法人わたぼうしの会・財団法人たんぼの家

協力：エイブルアート・カンパニー

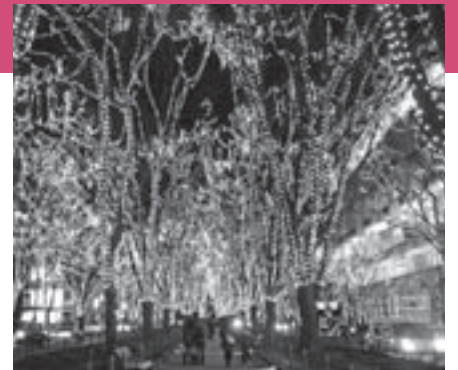
助成：日本財団 ROAD プロジェクト

いのちの手ざわり からだ・殻だ・空だ・だから……

2010 年度仙台大会 実行委員 **エッセイ** & 学生 **レポート**

東日本大震災では、2010 年度大会の会場であった、せんだいメディアテークも大きな被害を受けました。しかし、私たちが昨年、あの場所で感じた／味わった時間、空間、思いは、確かに残っているように思います。大会終了後、実行委員やボランティアの学生たちにより、artmeetscare cafe (仮) という新たな動きも生まれつつあります。人々のあいだに芽生えたつながりは、東日本大震災を経てなお、続いていくものでしょう。

あの大会をこれからにつなげていくためにも、いまいちど、大会の様子を実行委員 3 人のエッセイと、学生によるレポートで振り返ります。



定禅寺通で行われた「2010SENDAI 光のページェント」

エッセイ

名付けられて初めてつながる —地域に点在していた「アートミーツケア」の発見

薄井真矢 せんだいメディアテーク職員

メディアテークは美術・映像の活動拠点であり、コミュニケーション支援施設です。目や耳の不自由な方への情報提供のほか、さまざまな人が一緒に楽しめる文化事業を企画し、これら全体の活動の中で、利用者の間に「思わぬ出会い」を引き起こすような場と機会を提供しています。事業理念の一つに「あらゆる障壁からの自由」を掲げていますが、これは単に施設設備の「バリアフリー」を指しているのではなく、言語、文化、世代、性別、運営者と利用者など、その間にある障壁を幅広く捉えたものです。「アートミーツケア」も明確に分野を限定せず、「アート」と「ケア」が出会うことで生まれた多種多様な活動を紹介していますが、「アート」なのか「ケア」なのか「まだよくわからないこと」も含めて引き受けていることが、この学会の魅力だろうと思います。「自分に関係あるもの／ないもの」と線引きする態度をいったん保留し、意外な他者と出会えるよう、今回の学会の企画に携わっていただいたみなさんにも工夫を凝らしていただきました。小さいながらも数多くの出会いがあり、また、この機会に初めてまとまった東北での「アートミーツケア」活

動の掘り起こしができたのではないかと思います。

分科会 A 「見ることを超えて」では、「見える人」と「見えない人」の出会いがありました。学会期間中に開催していた、全盲の美術家、光島貴之さんの展覧会と一緒に体験し、参加者全員で「見えないものを見る」ことに挑戦しました。対話することで初めて見えてくるもの、他の人には見えて自分には見えていないものへの気づきから、自身の思い込みをいったん越えてみる欠かせない他者の存在を（障害のあるなしに関わらず）しっかりと感じる内容でした。仙台にはまだ「見える人と見えない人の鑑賞ツアー」が定着した活動としてありません。学会で蒔かれたこの種を育ててみたい方はぜひご連絡ください。



光島さんの展示作品を見る参加者

〈いのち〉を葬る？ —AMC 学会で「からだ(殻だ)」を問い直す

西村高宏 東北文化学園大学医療福祉学部准教授

〈いのち〉ということばが苦手である。強弱の差や表現の多様さがあるにせよ、つねに外側やら内側に向けて滾(たぎ)っているようでその内実が見えにくい。そのくせ 〈いのち〉にはこれまで手垢の付いたイメージ (なにか善いもの、健やかなものといったような) がしっかりと拵(こしら)えられており、そのことが、あらためてそれについて問い直そうとする気分を一層萎えさせます。イメージもしっかりしていて、それが多くの人のあいだで共有されており、さらには個々人もそれについてなんとなく分かったような気になっているもの、物事を本質から捉えなおそうとする者にとっては、このような対象が一番やっかいでたちが悪い。

そんな 〈いのち〉を切り口に、このたび仙台で行われたアートミーツケア学会にて哲学カフェを開催することになった。テーマは「いのちをおくる」、である。「いのちをおくるときにみえてくる身体との関わり方」について 〈対話の場〉を拓くことが今回のカフェの目的である。もちろん、ここで問題とされる「身体」は生きた「からだ」だけではなく死んだ「からだ(殻だ)」でもあるはずだ。〈からだを葬(おく)る〉という営みのなかから、生きた「からだ」や 〈いのち〉に関する新たな考察の糸口が見えてくるかもしれない、そのような期待を抱きつつカフェに臨んだ。

滝田洋二郎監督の映画『おくりびと』のシーンに見られるように、

〈からだ（殻だ）を葬（おく）る〉ときにそれとなく私たちが培ってきたあの手続きの多さや複雑さ（装束の着せ方や死化粧など）のなかにこそ、「からだ（殻だ）」や〈いのち〉を読み解くための重要なヒントが隠されているのではないのか。やっかいなテーマであったにもかかわらず参加者のあいだからはたくさんの発言があり、おおむね盛況だったように思う。もちろん、〈いのち〉についての最終的な結論にたどりついたわけではない（最初からそれを求めてもいない）。しかし、参加者の方が、これまでなんとなく分かっていた気になっていたものが、こうしてあらためて問われてみると実のところまったくわかっていなかったこと（さらにはそれを言葉をとおして相手に説明することがほとんどできないこと）に新鮮な驚きを抱かれているようで、それ自体刺激的な経験だったのではないかと感じた。

こここのところ医療や福祉、教育などの現場で言語的なコミュニケ

ーションとは異なった「身体的なレベルでのコミュニケーション」の活動（ダンスやヨガなど）を積極的に取り入れようとする動きがある。そこには、あたかも「からだ」の領野に降りていけばこれまで解決不能であった問題が解決するのではないか、といった身体的なコミュニケーションに対する過度の（しかも無批判な）期待が込められているような気がしてならない。アートミーツケア学会でもこれまでそのような切り口の発表やイベントが多くあった。しかしながら、そろそろそのような「期待」もふくめて医療や福祉の現場における「からだ」のもつ可能性／不可能性について改めて問い直す時期にきているのではないか。今回の仙台大会のサブテーマ「からだ・殻だ・空だ」の最後に「だから……（？）」ということばをあえて添えたのには、仙台大会実行委員によるそのような思いが込められてのことである。

アートミーツケアは愉快で効能じわーっの湯治温泉巡りによくにたり 関口怜子 ハート&アート空間ピーアイ代表

どうやったら、そこにいるだけで嬉しかったり、刺激的であり楽しくなるのか。そしてエールの交歓ができるのか……。

2010年のアートミーツケア学会を仙台で引き受けることになって、2008年の大阪大会、2009年の東京大会と参加した私が思ったことは、ミーツにどんな意味を持たせるのが大事なのだということ。言い換えれば、生きているいのちの手ざわり感をどう伝えようか。他の地域の活動やそれを続けている人々と東北のあれこれをフラットにまぜこぜにして、熱い温泉のような場をどう作れるかを考えていた2年間だったかも。

一番はじめにやったことは、場のあり方が大切なので、使い方が共有のデザインである仙台で唯一で自慢のメディアテークに協力してもらうことでした。おりしもメディアテークは10周年を迎える記念の年なので、アートミーツケアとして発信できるよいチャンスなものでした。おかげでしきりない流動的な会場で、いろんな人や協働の見本市に人が吸い寄せられてあちこちのぞけてよかったという声をいただけて……。ずいぶん私もウロウロ参加して楽しみました。

二番目は普段から真手に活動して熱い場を作って人々に世話人に

なってもらうことでした。一人ひとりに電話でお願いし、即刻OKの返事は気持ちのいいもの。

そこからさらに学生や若い人々がつながって多才なメンバーが構成され、これまたびぎりのパワーで、いい加減の温泉ができたかな。2日目に活動報告を彼等にしてもらったのだけれど、時間をとばして熱く長くまとめて語ってくれたときのイキオイ！！が次の動きを物語っている。

森下さんはじめ、事務局をたんぼぼの家の方々がやって下さって、これまた感謝でした。遠距離恋愛のようにメールしあって。電話での言語確認は面白かった程！

ともかくにも、ここから奇跡のような出会いは始まり、響くミーツが起こり、あちこちにさらなる何かが続いていけばいいがなあ。



宮城県立子ども病院スタディツアーの案内人を務める関口さん

アートミーツケア学会 2010 年度総会・大会 「いのちの手ざわり からだ・殻だ・空だ・だから……」

- 日程 2010年12月10日（金）11日（土）12日（日）
- 会場 せんだいメディアテーク7階スタジオシアター、他
- プログラム：

12月10日（金）

- 宮城県立子ども病院スタディツアー
・案内人：関口怜子（ハート&アート空間ピーアイ代表）

12月11日（土）

- メディアテークツアー「メディアテークをスキップする」
・案内人：佐藤泰（せんだいメディアテーク副館長）
- 講演「生きることを支えるアート」
・志賀玲子（舞台芸術プロデューサー、ALS-Dプロジェクト）
- 分科会

A：「見る」ことを超えて

- ・日野陽子（香川大学教育学部准教授）
- ・光島貴之（美術家、鍼灸師）
- ・阿部こずえ（ミュージアム・アクセス・ビュー代表）

B：いのちをささえるアートのかたち

- ・鹿野英生（医療法人社団初心会理事長、社のホスピタルあおば院長）
- ・武田こうじ（詩人）
- ・三浦正悦（穂波の郷クリニック院長）
- ・大石春美（穂波の郷クリニックゼネラルマネジャー・緩和ケアコーディネータ）
- ・大城泰造（東北福祉大学准教授、感性福祉研究所）
- ・進行：岩崎利次（いわさき生活福祉研究所代表）

- 主催：アートミーツケア学会
- 共催：せんだいメディアテーク、アートミーツケア学会仙台大会実行委員会

C:21世紀社会デザイン研究会ジョイントセッション

- 公共文化施設の公共性とは何か
- ・水戸雅彦（えずこホール所長）
- ・八巻寿文（せんだい演劇工房10-BOX二代目工房長）
- ・甲斐賢治（せんだいメディアテーク企画・活動支援室室長）
- ・コーディネータ：中村陽一（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授）

D：からだの感覚の世界を探る—ダンスワークショップ

- ・里見まり子（宮城教育大学教授）

E：メディアテークでみみをすます-サウンドスケープワークショップ

- ・中川真（大阪市立大学教授）

12月12日（日）

- 総会
- プレゼンテーション
- 哲学カフェ〜いのちをおくる〜
・進行：西村高宏（東北化学工業大学准教授）
- ディスカッション「いのちの手ざわり」
・グロッセ世津子（有限会社みどりのゆび代表）
- ・小岩孝子（NPO法人FOR YOU にこにこの家理事長）
- ・松田尚嗣（社会福祉法人あおぞら精神障害者通所授産施設もぐもぐ施設長）
- ・コーディネータ：播磨靖夫（財団法人たんぼぼの家理事長）

「見る」ことを超えて

大杉亜由美 東北芸術工科大学学生

このプログラムは、視覚障害を持った4人のゲストを含め、約20人の参加者で行われました。

パワーポイントを使った座学の後、ミュージアム・アクセス・ビューで行われている鑑賞のポイント「4つの「しない」ルール」

- ①静かに鑑賞しない
- ②見える人は一方的な説明をしない
- ③目の見えない人／見えにくい人は聞き役に専念しない
- ④すべて分かり合おうとはしない

を踏まえて、実際に参加者が「対話による鑑賞」を体験します。チーム分けにもルールがありました。

- 必ず全盲の方を1人交えて、4～5人で1グループをつくること。
- 晴眼者の中からは、第三者側として見る記録係を1人選出すること。

鑑賞するのは、光島貴之さんの『生活の画』という8点の作品。携帯電話の画一つをとっても、想像力豊かな意見が飛び交います。

「電波のようなものがグニョグニョしている」→未来を発信しているのでは。

「画面には目がうつりこんでいる」→耳ではないか、口ではないか。
「いや、自分は携帯電話ではなくフルーツポンチのように見えていた」

「線のゆらぎは日常の危険を表しているのではないか」など、三者三様。

意見交換の場では「共感できる楽しさ」や「自分とは違う見え方の発見」そして「見えない方からの『主人公は映っていますか?』という質問にドキッとした」という、何気なく持っている個人の先入観に驚かされる場面もありました。

私が特に感じたのは、自分の認識と相手の認識の差に気づかされる面白さ。意見を言いあっているうちに、説明的な話し方や、作り手側の感覚に寄り添うような質問など、一つの絵画を鑑賞するのに、たくさんの切り口があることがわかります。

そして説明することの難しい、絵を見たときの温度や感覚などを言葉で表現すること

で、相手の個性を感じました。自分の個人的な感覚で鑑賞するよりも、その作品がとても豊かに感じられ、またひとつ鑑賞の楽しさを知ることができました。



公共文化施設の公共性とは何か

長谷川あい 東北大学農学部学生

大衆消費社会であり、まだまだ文化活動が余暇を注ぐものという認識が残るいま、「アート」とは何か、「公共性」とは何か、「公共文化施設」の役割とは何か。実際に施設運営に従事する水戸さん、八巻さん、甲斐さんと、社会デザインを専門に研究している中村さんの話を中心に、キーワードに興味を持った参加者も意見を交え、考えた。

1. 公共文化施設の役割と、できること

仙南芸術センター(えずこホール)とせんだい演劇工房10-BOXは共通して、ワークショップやアウトリーチに力を入れている。えずこホールでは、小学校に多くのプログラムを持ち込み、今では年間50以上の企画が行われている。目的は、子供のアートとの出会いの場を設けることである。子供たちはアートに触れたとき、(切り口は問わず)反応し、感動し、のめり込む。アートに触れることで、子供たちからそういった好奇心、感動を掘り起こすことができる。また作品自体だけでなく、アーティストとの出会いもねらいの一つである。アーティストは子供たちにとって、「好きなことを一生懸命やって」いて、かつ「その道に成功している大人」である。



そういった大人との出会いは貴重な経験である。こういった経験を経て、子供が変わっていく。子供が変われば地域が変わる。10-BOXの浦戸第二小学校、浦戸中学校の演劇活動ACTへの協力も同様

だが、決して金銭的利益は望めないし、影響も数値化できるようなものではないから簡単に行える活動ではない。しかし、確かにある素晴らしい感動、反応のために力を惜しんではいない。アートが豊かで余裕のある人たちが楽しむもの、という悲しい意識から、それは社会が豊かになるうえで必要なものである、という意識をあたりまえのことにしていく事業を、すすんで行っている。

公共生涯学習施設という側面をもつせんだいメディアテーク(以下、メディアテーク)、甲斐さんは「公共性を私的に徹底的に考え」ながら運営、企画を行っている。メディアテークは趣味の場ではなく学びの場である。しかし情報を提供するだけでは、学びの場にはならないのである。桂英史さんがメディアテークのコンセプトブックで言っているように、大切なことは、提供することと提供されることをごっちゃに考えることである。利用者が学び、そして企画者(必ずしも職員ではない)も学ぶ。イメージされ進化してゆくメディアテークのコンセプトである。

2. 公共性とは

施設運営は「行政」が行っているイメージをもたれるものの、「市民」が運営している。公共施設ゆえ、なんらかのきまり、ルールは必要であるが、そのためにいろんな企画が実現しない状態は「公共性」を保っていると言えるだろうか。むしろ、利用者のいろいろなニーズに応えられる状態であるべきではないだろうかかと水戸さんは言う。施設は、演目のジャンルや、客層に制限をつけずにその場の作り方を考えるべきである、という意見も参加者から出た。もちろん、特に考えずとも市場はまわるから在り続けることはできるだろう。しかし、公共文化施設の役割を十分に担っていくには、重ねて言うが、考えるべきである。そしてその施設をなりたたせるのは、地域市民である。

3. アートが広まるには？

自分が大学生活をしていて、実感するのは、やはりアートは「時間のある人のやるもの」であることであった。どうしたら生活の一部という意識が広まるのか。質問し、話を聞くなかで理想的な構図が見えてきた。

多くの人はやるべき仕事や勉強に追われているし、家族とすらコミュニケーションが取れない現状がある。極端に言いきってしまえば、社会が鬱々としているのである。この問題の切り口が、アートではないか。そしてそれを広めるのが、公共文化施設の役割になる。

井上ひさしさんは「劇場は病院である」と言ったという。アートは人を癒す側面がある。だから地域の中心部にあって、生活に身近であるべきだ。「何かやっているとこがある」。それだけの興味を惹ければ十分だ。公共文化施設の利用が、生活に身近になる。ふらっと立ち寄るだけでいい。それが、アートとの出会いになり、糸口になる。メディアテークはこの意味でとてもいいはたらきをしていると、仙台に住んで間もないが確かに思う。

そしてこれは、逆でも効果的である。アートに興味を持つ。宣伝

を目にとめて、公共文化施設を利用する。すると好奇心から、コミュニティにつながるのである。アートはコミュニティとつながっている、生活と結びついたものなのである。施設を通してアートが深まり、コミュニティが広がるのである。施設の需要が増え、地域が活きいきしてくる。

つまり、2つのベクトルであるが、そうではない。アートを経験することも、公共文化施設が使われることも、地域の、社会の発展につながるのである。アートは生活の一部であり、コミュニティありきである。コミュニケーションが増えアートがいつも人と在るようになれば、社会はより「豊か」になるのではないかな。

同じ地域で文化活動に従事する水戸さん、八巻さん、甲斐さんの話が聞いたのは貴重な経験だったし、いろいろな地域で、いろいろな方面に従事するさまざまな年代の方の意見を聞くことで、発見の連続だった。3時間弱、得たものが多すぎて消化しきれていないのは事実である。課題はたくさんある。しかし、ディスカッションを終えて視界はとてもクリアだった。

からだの感覚の世界を探る —ダンスワークショップ

鳥蘭高娃 (ウランゴワ) 宮城教育大学大学院院生

まず、ワークショップの流れと内容を見よう。最初に、参加者全員を2つのグループに分け、〈空〉と〈川〉と呼ぶ。2人組みで運動する。軽く、自然の動きでからだの感覚を感じながらポーズする。次に、置かれた紙袋の中の物を手で触り、どんな物かを感じ取る。袋をひとつ選び、体を使って、中の物を表現する。私は石を感じ取り、石を表現した。他の紙袋の中は、木、植物の種、台所洗い用品、糸、玉葱の皮、木の葉など普段よく見るものであった。硬い物もあれば柔らかい物もあった。さらにひとつ下の階に降り、参加者がお互いのからだの輪郭を用意した和紙の上に横になって描きあった。そして、全身の外側の輪郭線の中に、からだの感覚、考えを色ペンやクレヨンなどを使って描いた。そのときも、皆がガラス壁に沿ってなにか自分なりの考えをからだで表現した。最後は、1階に降りて、メディアテークの定禅寺通りに面したガラスに沿って、全身を使って、自分の表現したいものを心がけて、からだの感覚を読みながら動いた。その場面は、美しい、綺麗、生き生きする、ホッとする、溶けるなどいろいろな感覚が混ざり込んだ。その感覚は体験者だけがわかると思う。体験者は満足した顔で「今のからはワークショップに参加する前と比較したら全然違う、不思議だな」と言っていた。私にとってもはじめての体験であり、自分のからだで、何だろう

と考えた。からだの感覚を呼び覚まし、感覚の世界が広がったと思う。不思議だった。硬いからだは軽く、柔らかくなったり。からは自分のからだじゃない感覚とか、からだで言葉ができる、からだで美しいものと感じたり、からだで深い意味を持つもの、神秘的なものと感じた。



また「舞踊や音楽との出逢いとは、まさしく人との出会いである」と言うように、参加者は一般的な社会人であり、それぞれ別の仕事をしているのだが、このワークショップに参加し、お互いに交流、コミュニケーションもできて、普段はあまりない人と人のつながりをつくることができた。

アートの力を感じとった、このワークショップ体験を、これからの勉強、生活の中に生かして行きたいと思う。まだ今度、このような体験があれば参加したいとも思う。

メディアテークでみみをすます —サウンドスケープワークショップ

高田和成 東北芸術工科大学デザイン工学部情報デザイン学科学生

12月11日の夕方突如として現れたその足あと。その日、せんだいメディアテークを訪れた人はそれを見てなんだろうと不思議に思ったのではないのでしょうか。実は、分科会Eで作った物でした。テーマは「ともに聴く」。中川真先生の指導のもと、メディアテークの職員も含め8人で行ないました。

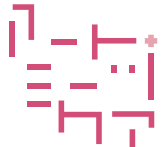
はじめに先生の指示で、画用紙をつかって自分の足型を作りました。これは後ほど使用します。次に「好きな音は」、「消えてほしくない音は」、「最も記憶に残っている音は」というのをそれぞれひとつずつ挙げることになりました。メンバーを半分に分けて、自己



紹介もしつつそれぞれを話しあい、みんなにどのようなものが挙げたかを発表しあいました。

今度はそれぞれがメディアテークの中で空間を意識して自分が気になる音を探すことになりました。そしてとうとう紙で作った足型の登場です。どうしてこの場所が気になったか説明した後に、1日限定でその音のする場所に足型を貼付けました。例えば、メディアテーク職員の斎藤さんの好きなどころは吹き抜けになっている階段の5階の踊り場です。そこにいるとメディアテーク内の音がわかるためどこで何をやっているのかわかるそうです。

今回参加者と音をテーマに、いろいろ話しましたが、その人の好きな音や経験してきた音の話話を聞くと、少しですがその人の持っている感覚やその人の人間性を見ることができました。音のなかにある、その人のところに触れることで空間を共有できていけないでしょうか。自分の周りにある音、街の音、地元の音などを少し気にしてみようと思いました。



アートミーツケア学会 入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのおみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

- 1. 大会の開催**
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。
- 2. 調査研究の推進**
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。
- 3. 学会誌の発行**
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。
- 4. ニュースレターの発行**
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。
- 5. フォーラム、シンポジウムの開催**
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。
- 6. プログラムの開発、プロジェクトの実施**
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。
- 7. 国際交流の推進**
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

- 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先 アートミーツケア学会
口座番号 00920-4-252135
- ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。
- 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

- 個人会員 一般 10,000円 学生 5,000円
- 賛助会員 30,000円

役員（敬称略）

- 会長 鷺田清一（大阪大学総長）
- 副会長 畑 祥雄（関西学院大学教授）
- 常務理事 播磨靖夫（財団法人たんぼぼの家理事長）
- 理事 秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應院住職）
- 理事 坂倉杏介（慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所特別研究講師）
- 理事 塩瀬隆之（京都大学総合博物館准教授）
- 理事 志賀玲子（舞台芸術プロデューサー、ALS-Dプロジェクト）
- 理事 鈴木理恵子（女子美術大学非常勤講師）
- 理事 関口怜子（ハート&アート空間ピーアイ代表）
- 理事 ダーリング・ブルース（美術作家）
- 理事 銅金裕司（メディアアーティスト）
- 理事 中川 真（大阪市立大学院文学研究科教授）
- 理事 並河恵美子（NPO 法人芸術資源開発機構代表）
- 理事 野津 亮（大阪府立大学助教）
- 理事 日野陽子（香川大学教育学部准教授）
- 理事 本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター / 文学研究科准教授）
- 理事 的場政樹（医療法人直志会袋田病院院長）
- 理事 水野哲雄（京都造形芸術大学子ども芸術学科教授）
- 理事 見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
- 理事 三輪敬之（早稲田大学創造理工学部教授）
- 理事 森口ゆたか（NPO 法人アーツプロジェクト代表）
- 理事 山口悦子（大阪市立大学医学部付属病院安全管理対策室専任医師）
- 理事 横川善正（金沢美術工芸大学教授）
- 監事 太田好泰（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
- 監事 三浦久子（株式会社エイジレスラボラトリー会長）

アートミーツケア学会 2010年度総会・大会

- 2011年11月25日（金）、26日（土）、27日（日）
- 京都造形芸術大学 京都・瓜生山キャンパス
- テーマ：「こども」・「震災」・「アート」

* 11月25日は、京都市内でスタディツアーを行う予定です。

プログラムの詳細やプレゼンテーションの応募方法は決まり次第、学会HPにてご案内いたします。

*お申し込み・お問い合わせは、事務局までお願いします。

編集後記

- 雨が続いています。この雨の下、あの人はどうしているだろう。どんな思いでいるのだろう。何ができるのか自分に問うと同時に、他者へ想いを馳せることが、いま、とても大切なのだと感じています。（井尻）
- 「心をかける」、「目をかける」、「声をかける」、そして「手をかける」ということばを聞きました。すぐにできることはなくても、被災した人たちのことを思いながら生活を送れたらと思います。（森下）

アートミーツケア学会ニュースレター Vol.8 2011年7月1日発行

発行 アートミーツケア学会 <http://popo.or.jp/artmeetscare/>
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 財団法人たんぼぼの家内
Tel.0742-43-7055 Fax.0742-49-5501 E-mail.art-care@popo.or.jp